

# 臨床心理学におけるナラティブ分析

——研究事例の紹介と考察——

博士課程 1 年	薛	海	升	博士課程 2 年	江	刺	香	奈
博士課程 2 年	津	田	容	子	博士課程 1 年	太	齋	慧
修士課程 2 年	福	田	聖	修士課程 1 年	渡	瀬	隆	雄
研究生	王	奕	涵	教授	能	智	正	博

## 1. はじめに

本稿は、近年質的研究のなかでも注目されているナラティブ分析の全体像を素描し、この分析法を、臨床心理学研究者のためによりアクセスしやすくすることを目的としたものである。質的研究法が心理学のなかでも市民権を得ようになり、現在では国際的な専門誌がいくつも発刊されているし、アメリカ心理学会（APA）の質的研究論文評価基準なども公表され、研究者や学生にとって、質的研究はますます身近なものになりつつある（Levitt, 2019）。質的研究の教育も心理学の大学院のなかで広がっており、その方法や手続きをわかりやすく解説したテキストも数多く出版されている（Creswell & Poth, 2017等）。質的研究のなかでも特に、グラウンデッド・セオリーやKJ法などのいわゆる「カテゴリー分析」については、その手順が比較的わかりやすく段階化されており、伝統的な心理学の学術誌でも受け入れられつつある。

それに対し、ナラティブ分析やディスコース分析などの「シーケンス分析」については手続きがあいまいで、書き手によって述べていることが違っていたりもするので、なかなか学びにくく使いにくいという印象が強い。その背景には、「ナラティブ」や「ディスコース」の概念が複雑であり、質的なデータをどう扱うかについても多様性をもっているということがあってと思われる。本稿ではナラティブ分析を扱うのだが、「ナラティブ」をどのように捉えるかによって、分析の目指すところも方法も違ってくる。単純な手続きの段階として思い描きにくいのは当然とも言える。

ナラティブはしばしば「物語」や「語り」と訳されるが、そこには様々な意味が含まれている（森岡, 2013）。構造としては「はじめ—中間—おわり」という特徴をもつことが多い一方で、「言う」や「話す」とは異なる独特の言語行為のニュアンスがそこに重なり、その場での

意味生成もその重要な特質とされる。本稿では、「語る」という語り手・聞き手を巻き込んだ行為に焦点をあてながら、図1のようにナラティブを整理することを試みていく（能智, 2022を改変）。

この図は、ナラティブの構築を個人的なものか社会的・対話的なものかという縦軸と、今・ここでのものか持続的なものかという横軸によって4つの象限に分けたものである。ナラティブ分析は、こうした幅広いナラティブのどこに注目するか、どの面を解明したいと思うかによって、方法や手続きが微妙に違って来よう。以下では、各象限に焦点を当てながら、臨床心理学とその関連領域でどんな研究が見られるかの事例を挙げながら、その方法的な特徴について紹介する。ただこ

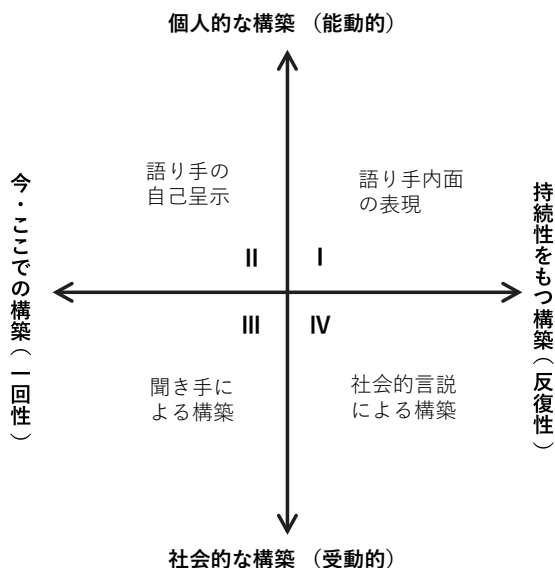


図1 ナラティブの概念の広がり

の整理も便宜的なものであり、すべての研究が1つの象限だけに収まるものではないことには注意を要する。

## 2. 語り手内面の表現

第Ⅰ象限はナラティブを語り手の内面の表現、あるいは、ある程度安定した主観的な世界の現れと捉える点で、現象学的・実存論的な見方と親和性がある。またその内面世界は、個人が能動的に構築し、一定の持続性をもつものとして理解されることが多い。この象限に該当するナラティブ分析は、Riessman (2008/ 2014) がテーマ分析 (thematic analysis)、あるいはテーマ的ナラティブ分析 (thematic narrative analysis) と呼んだものである。Crossley (1999/ 2009) のナラティブ心理学の分析法も、目指すところは共通している。テーマ分析では、語りの形式、構築の仕方 (誰に、何の目的で、どのような文脈かも含む)、聞き手との相互影響にはあまり注目せず、語られた内容に注意を払う。その点では、グラウンデッド・セオリーやKJ法等のカテゴリー分析にも近いところがある。実際カテゴリー分析にもテーマティック・アナリシスと呼ばれる、データからパターンを見出すアプローチがある (土屋, 2016)。ただ本節で扱うテーマ分析は、それとは異なるナラティブ分析の一つである。

まず、ナラティブ分析に共通の特徴ではあるが、特定の事例を中心に分析し、事例から理論化するとところが違っている。例えばグラウンデッド・セオリーでは、複数の事例から共通要素としてのカテゴリーやテーマを取り出し、一般化可能性のある理論化を目指す。それに対してテーマ分析では、個別事例から転用可能性のある知見を探ろうとする志向性が強い。また、多くのカテゴリー分析では、逐語を「切片化」してラベルをつけ、テーマを見出そうとするが、テーマ分析では語りを区切らずに全体として解釈し、文脈のなかで現れる意味の豊かさを活かす。例えばCain (1991) は、アルコールクス・アノニマス (AA) のメンバーの語りやその組織の資料に含まれるシークエンスから、出来事の順序付けや語られる内容のパターンを見出し、参加者が自分の人生体験を、AAが提唱するストーリーモデルと重ね合わせることで、自身のアイデンティティを描き出す様子を明らかにした。

さらなる違いは、先行研究や先行概念の位置づけ、使い方にある。グラウンデッド・セオリーでは基本的に、初期段階での先行概念の使用は控えられるが、テーマ分析では新たな視点を含む枠組みや理論を用いながらナラティブの読みを深めようとするところがある。例えばTamboukou (1999, 2003) は、空間と場所に関する体験

から女性教師の自己構築を理解するため、対象者の生きた時代の文脈の知識を当時の自伝・伝記などから収集し、その知識に照らしてデータを読み直し、そこで見出されたテーマについても先行研究と比較し、歴史的な視点のもとで考察を深めた。

また、より近年の例ではKelly & Ward (2020) によるギャング離脱の語りの分析がある。「ギャングの首都」と呼ばれる南アフリカ・ケープタウンで、元ストリートギャングらが離脱とその過程をどう理解しているかを、テーマ的ナラティブ分析を用いて分析した。その際、得られたデータからテーマを見出すのにレジリエンスの概念を利用した。具体的には、まずは語りの逐語記録自体をコード化し、各コードが先行研究のレジリエンスをどの程度反映しているかを探索した。ここでレジリエンスの枠組みを使ったのは、「離脱」という犯罪に関わらないライフスタイルを維持するプロセスには多くのリスク要因があり、規範的なライフスタイルにコミットすることが極めて難しいからである。その点レジリエンスの概念を作業仮説とすることで、ギャングからの離脱も含め、離脱プロセスに伴う課題に対処しそれを克服する面に注目できる点を重視したのである。

最後に、こうした特徴をもつテーマ的ナラティブ分析の有用性について触れておこう。この分析は語る内容に着目することで、語り手の生きる世界の理解に近づくことを可能にし、特定の条件をもつ人々への支援にも応用できる。Riessman (2008/ 2014) もこの種のナラティブ分析を「最も直接的でかつ人の心に訴えるもの」(p.102) としている。また、分析対象としてはインタビューの語りのみならず、エスノグラフィー的観察や自伝、公的な文書等広範囲のナラティブ・テキストに適用できる。さらにこの分析により、ストーリーが語り手にとっての意味を超え、社会的アイデンティティや集団への帰属、集団行動に対し影響を与える可能性もあるだろう。

## 3. 自己呈示としてのナラティブ

第Ⅱ象限はナラティブを語り手の聞き手に対する自己呈示と考える見方である。ここでは、聞き手に受け取ってほしい自己像が語りをガイドすることになる。この見方の背景にある概念として、Austin (1962) の提唱した発話行為がある。発話行為論によれば、ナラティブは語り手による行為の遂行とみなされる。語り手は語りによって聞き手に働きかけ自己呈示する存在とみることができ、ナラティブはアイデンティティを構築する行為として理解できる。こうした認識論のもとナラティブにお

ける語り手の能動的なアイデンティティ構築を分析する方法論として、ポジショニング分析 (Bamberg, 2004) および「スモールストーリー」の概念 (Bamberg & Georgakopoulou, 2008) が挙げられる。

ポジショニング分析では、語りにおけるミクロなアイデンティティ発生のプロセスを、どのように自らを主体として位置づけるかという観点で分析する。具体的には以下3つのレベルのポジショニングが検討される。「レベル1：語られたストーリーのなかで登場人物をどう位置づけるか」。細かい言語使用の分析により、登場人物や世界をどのように描いているかを明らかにする。「レベル2：語り手がその場の対話状況において自分自身をどう位置づけるか」。聞き手との相互作用の中で、語り手がなぜ特定のポイントでストーリーを語り、それによってどのような自己呈示を達成しようとしているかを明らかにする。「レベル3：語り手が総合的な自己/アイデンティティの感覚を支配的言説に関連づけてどう位置づけるか」。文化的なディスコースや規範的な立場に対して、受け容れる、距離を置く等のような位置づけを取って総合的な自己の感覚を語るかを明らかにする。

スモールストーリーという概念は、語りの細部から語り手の自己の位置づけを理解しようとするポジショニング分析のアイデアから派生してきたものである。前節でみたテーマ的ナラティブ分析等においては、ナラティブは語り手の主観的世界を反映するものとみなされ、過去の出来事を語り手がどう意味づけるかが探究される。それゆえ過去の経験を語るインタビューや自伝等、首尾一貫した時間的経過をもついわゆるビッグストーリーが分析の対象となってきた。それに対してスモールストーリーは、こうしたテキストの基準からは外れるような、必ずしも大きなまとまりをもたないナラティブを指している。そこには進行中の出来事や、未来や仮定の出来事、過去の語りへの言及、語りの拒否も含まれ、Bamberg & Georgakopoulou (2008) はこうした小さな語りについて語り手の自己が絶えず表現されていると考えている。この視点で語りを分析することを通じて、自然な日常場面でのやりとりの端々に現れる自己呈示を明らかにできる可能性が出てくる。もちろん、聞き手との相互作用も考慮する点では第Ⅲ象限にもまたがるし、社会のディスコースへの位置づけをみる点では第Ⅳ象限にも関係するわけだが、語り手の能動性を重視する点で第Ⅱ象限への結びつきが最も強いといえるだろう。

ポジショニング分析およびスモールストーリーのアプローチを採る研究としては例えば、記憶障害を経験する高齢者が会話の中でいかに能動的にアイデンティティを

構築するかを検討したもの (Lenchuk & Swain, 2010) がある。この研究で扱われたデータは、記憶障害をもち介護施設に長期間暮らしているひとりの高齢者 Alise が研究者と共に映画を観たりしながら交わす会話等、日常に近い場面で得られている。分析手続きは詳述されていないが、スモールストーリーのアプローチを採ることが明示されており、結果からもポジショニング分析が行われたことが読み取れる。Alise がある俳優に対する愛情を口にしたたり、映画鑑賞の楽しみを共有できる存在として他の住人に言及したりする言葉の端々からは、他者とともにいて芸術を愛していこうとする彼女の世界観を読み取ることができ、この点はポジショニング分析のレベル1に対応する。俳優について質問をする研究者とのやり取りの中で、Alise が適切な情報に加え発展的な内容を話すことができる自己像を呈示するのを読み取る点はレベル2にあたる。彼女を無能力な認知症患者として位置づける施設側のディスコースに対して、Alise が一部でそれを内面化しつつも沈黙という形で抵抗し、研究者とのやりとりの中で有能な自己の感覚を表現しようとする点は、レベル3の分析で読み取られたものである。

こうしたアプローチによる研究は、臨床現場において被支援者がどのような自己呈示を行い自己の感覚を構築しているか、自然発生的なその場でのやりとりの言葉の端々から捉えていく方法の可能性を開くことになるだろう。特に抑圧的に位置づけられがちな立場の被支援者がどのように能動性を発揮し得るか理解することの意義は大きいと思われる。

#### 4. 相互作用の産物としてのナラティブ

第Ⅲ象限は、語りの聞き手の方が質問や相槌等の働きかけを通じて語り手のナラティブを枠づけるという面を示している。対話において生み出されるナラティブは、聞き手に伝わり理解されることを目指すものであるため、聞き手のわずかな言動に反応して軌道修正がなされたりもするし、ときには内容が大きく変わってしまうことすらある。「聞き手による構築」としてのナラティブを分析するために使われる代表的なアプローチとしては、対話/パフォーマンス分析、会話分析、ミクロなディスコース分析等が挙げられる。まずこの3つについてごく簡単に説明しておこう。

対話/パフォーマンス分析は、Riessman (2008/ 2014) が大別したナラティブ分析の一つである。このうちパフォーマンスの面は語り手が聞き手に及ぼす影響(=遂行性)にアクセントが置かれており、3節の「語り手の自

己呈示」にも関係するが、それに対して対話の面は、聞き手が語り手に及ぼす影響、つまり干渉性を含んでおり、本節の「聞き手による構築」を分析する際に利用できる。

次に挙げた会話分析は、Sacksが提唱しShegloffとJeffersonが発展させた分析法で、Garfinkelのエスノメソドロジーの影響も受けている(山田, 2013)。Goffman (1963, 1981) によれば「会話 (conversation)」とは、「話し手と聞き手が存在し、社会ルールとは独立した独自の秩序がある相互行為」であり、この定義には、その場における聞き手の存在、および聞き手からのものも含む相互的な影響過程が含まれている。

3つ目のディスコース分析だが、ディスコースとは、「複数の文や発話から構成される単一の主題についての言語表現のまとまり」で、訳語としては、言語学では「談話」、社会学では「言説」が使われることが多い。こうしたディスコースを分析する方法のうち、ミクロなディスコース分析はPotter & Wetherell (2002) が提唱したもので、話し手と聞き手の細かな相互作用である「談話」が対象になる。そこでは、両者のやりとりのなかでどのような言語表現が用いられており、それらが相手との関係においてどのように組織化されるのかが検討される。

ナラティブの「聞き手による構築」を分析した典型的な研究としては、例えば浜田(2018)の自白や供述の分析が挙げられるだろう。そこでは、被疑者の「自白」が聞き手としての警察官や検察官によって、しばしば本人たちも気づかないうちに誘導される過程が明らかにされた。その他、幼少期のナラティブの分析においても、結果として聞き手である大人の影響が指摘されている。ここではそんな研究の一つとして、Fivush et al. (2020) による「幼少期の親子の思い出話における語りの編集者としての発達の基盤」を紹介しておきたい。

Fivush et al. (2020) では、幼児が自分の体験した出来事について語る際に、聞き手である母親の関わり方がその語りをどのように構築するか、また、その後それがどのように幼児の自己理解を形成し自己語りの能力の発現にどう影響するかを分析した。筆者らはまず、幼児(19ヶ月と51ヶ月)と母親の間で思い出話をしている場面を検討し、その語りが具体的に豊かな母子とそれほどでもない母子を選び出した。2つのグループのやりとり内容を比較した結果、豊かな思い出話をしていた母子では、母親が積極的に子どもに問いかけや伝え返しをすることで、子どもの語りを引き出し、時には、子どもが伝えたいことを推測・解釈しながら子どもの語りを代弁・促進することで、子どもは活発に詳細に思い出話を語っていることがわかった。一方、貧しい思い出話をしてい

た母子では、母親から子どもへの働きかけが見られず、子どもの思い出話は量・質ともに希薄で、両者の会話はぎこちなく沈黙も多かった。つまり母親は、子どもが思い出話を語るためのストーリーの構造を提供し、内容を誘導し、子どもの自己を語るための能力の基盤を構築する役割を担っているのである。

また、思春期の子どもをもつ母親による働きかけにも同様な傾向が認められた。すなわち、子どもの価値観を詳細に伝え返し、子どもの目標を確認することで、子どもの価値観や動機づけを強化し、子どもの「主体性」と「共同性」を育てていたのである。その結果として、豊かな思い出話をしていた母子の子どもは、ある出来事と別の出来事、過去の自己と現在の自己を結びつけ、新たにその語りの繋がりを創る能力を示した。

こうした影響過程は母子の対話場面にとどまるものではない。調査インタビューにおいても同様で、話し手から豊かな語りを引き出せるかどうかは話し手だけでなく聞き手にも依存することが考えられる。そうした聞き手の役割を積極的に利用したインタビュー技法として、例えば大倉(2008)などが提唱する「語り合い」の手法がある。この方法では、調査者と協力者の間に役割の大きな違いはなく、話し手と聞き手が明確に区別されることもない。そうした対等な関係性のなかでのやりとりをもとに、より豊かな語りを生み出そうとしているのである。

また、同様の影響過程は臨床場面でも利用できるだろう。クライアントが体験を語る際、セラピストが聞き手として共感的に理解しながらも、要所で効果的に伝え返し、時に焦点化や直面化させることでクライアントの気づきを促進できことはよく知られている。さらに言えば、セラピストが適切に語り介入する時、クライアントの意味の再構築が促進され、適応的な現実が共同構築され得るであろう。ナラティブセラピーの質問技法や家族療法のジョイニングなどクライアントに積極的に働きかける関わり方がこれに当たる。

## 5. 社会的言説による構築

第IV象限は、より大きな社会のなかで共有されている言説による構築で、常識等のかたちで語り手の思考と発話が枠づけられるところに特徴がある。言説はdiscourseの訳語の1つであり、近年では「ディスコース」とカタカナ表記されることが多い。分析においてディスコースの概念を用い、社会的現実の構成における言語の役割を重視するアプローチの総称がディスコース分析だが、そこでは様々な研究テーマや多種多様なデー

タが扱われる。つまり、第Ⅲ象限に関わるようなミクロなディスコース分析もあれば、本節で扱うようなマクロなディスコース分析もある (Burr, 2015/ 2018)。例えば、マクロな立場に立つとされているフォーコー派ディスコース分析は、人々が利用可能なディスコース資源およびディスコースが主体性、自己性や権力関係を構成する様子に関心を持っている (Willig, 2003)。

言説としてのディスコースの力を強調するディスコース分析に対して批判的な視点をもちながら発展してきたのが、Emerson & Frosh (2004) によって提案された批判的ナラティブ分析 (Critical Narrative Analysis) である。彼らは、人々の行動や見解は社会におけるディスコースの産物でしかないというマクロなディスコース分析の考え方を問題化し、同時に、分析が社会的アクションへとつながらない「潜在的に保守的な」立場を批判した。彼らのナラティブ分析は、社会的言説の理解を土台とする点ではディスコース分析と共通するが、個人々が自らの生を説明しようとする能動的な構造化プロセスに焦点を当てる点で異なっている。つまり彼らは、支配的な言説との関連で主観が社会的に構築される点に注意を払いつつ、「反省的な開放性 (reflexive openness)」によって個人と社会を相互に変化させ得る批判的な方法論として、ナラティブ分析をとらえ直したのである。

なお、同じ「批判的ナラティブ分析」の呼称を使っても、Langdrige (2007/ 2016) のそれはややニュアンスが異なる。後者は、現象学的視点を基礎にしながらその限界を意識するところから発展したものである。いずれの批判的ナラティブ分析も個人のナラティブに対するディスコースの影響を解釈し理解しようとするが、本節では紙数の関係で、Emersonらの批判的ナラティブ分析を用いた研究を紹介しながら、このアプローチの臨床心理学研究における役割と可能性について考えたい。取り上げるのは、問題的ポルノ使用 (Problematic Pornography Use, 以下PPUと表記) が生じる条件を探索した Chasioti & Binnie (2021) の研究である。

この研究の背景には、問題的ポルノ使用の原因を理解するのに、これまでインターネットやポルノへの依存の概念化のみが重視されてきたという事情がある。先行研究の大半は、PPUの体験自体には焦点を当ててこなかったのである。そこで筆者らは、マスターベーション自粛運動のオンライン・コミュニティのメンバーが、自分たちの問題視するPPUの原因についてどのように語るのかという研究設問を立てた。そしてエスノグラフィーの手法を使い、そのコミュニティに対する5年間の投稿から48人・121件の投稿を取り上げ、分析対象とした。

データの分析は段階的に行われ、まずは語り手の声 (経験、感情、行動) とディスコースの選択 (経験の語りを形作り伝える過程に影響したと考えられる、広い社会文化的実践) が抽出された。また、Murray (2000) の提唱したナラティブの分析レベル (ナラティブ・レンズ) をもとにして、個人的レベル、対人的レベル、「公的物語」のレベル (ポジションとイデオロギー) が区別された。具体的には、まずデータを繰り返し読み込んで、暫定的なコードをつけ、並行して語り手それぞれのストーリーにおける重要な要素を要約した。次に、そこに認められたパターンやコンセプトを特定しつつ、それに関して考察しメモを書いた。それらのパターンはグループ化され、修正を繰り返しながら最終的にそこに認められるテーマの言語化を行った。さらに、抽出されたストーリーや定型的な物語を比較し、Murrayのナラティブ・レンズを使用して個人間の差異と共通点を見いだした。

分析全体を通して重点が置かれたのは、アイデンティティと経験の共同構築である。結果として、状況的資源、物質的条件、身体化された観衆の間の弁証法的関係は、自己探求、実験、社交という動機を持つ「オンライン上のペルソナ」を生み出すこと、脆弱性の感覚によって、ポルノグラフィーが逃避と承認の手段として利用されること、回復と再発の概念によって枠付けされた禁欲へのコミットメントが、苦痛を維持するための主要な要因であること等が明らかになった。

臨床心理学は精神医学や障害学分野と関連する社会運動とともに発展してきた学問でもあり、その点では社会批判の視点を含んだ批判的ナラティブ分析と親和性があるとも言える。臨床心理学のもつ実践への志向性は、批判的ナラティブ分析を導入することで、個人レベルの実践を超えて社会的なレベルにまで可能性を広げられるだろう。また、ディスコースを個人のナラティブにつなげていく際に見られる解釈学的方法も、背景情報を患者やクライアントの困り感につなげて理解を深めていく臨床心理学的実践に共通する要素を含んでいる。背景情報を収集するには、話を聞くだけではなく直接現場に向いて観察する場合もあるだろう。批判的ナラティブ分析で推奨されるエスノグラフィーの姿勢は、そうした場面で文脈情報を収集する際にも役立つと思われる。

## 6. 自己内対話としてのナラティブ

ナラティブの生成は図1に示された4つの象限のいずれか1つで理解できるものではなく、先にも述べたようにしばしば複数の象限にまたがる視点が必要になる。本

節では、想定された他者との対話、つまり自己内対話においてナラティブが生成されるという面を扱う。第Ⅱ象限や第Ⅲ象限で扱った、語り手と聞き手の相互作用が、自己の内部に持ち込まれていると言ってもよいし、聞き手がより一般的な他者に広がる場合には、第Ⅳ象限に見られる力動が自己内で再現されているとも言える。

この側面を理論的に捉えたものとしては、「対話的自己理論 (dialogical self theory)」がよく知られている (Hermans & Kempen, 1993)。そこでは、単一の実体的な「自己」は仮定されず、複数の「私」や私に関わる他者やモノ、私の人生の出来事が内面化されて「自己」を構築していると考えられる (溝上, 2008)。それら様々な「私」は、ある程度独立していることもあるが、大抵の場合多かれ少なかれ相互に関連し合い、互いにポジションをとりながら存在している。

この理論の主な特徴としては次の2点を挙げることができる。第1に、自己の世界に存在するさまざまな私、他者、モノをすべて「私(I)」の形であるとし、それらをポジションに変換する。第2に、変換されたI-ポジション同士は、そのポジションからの「声 (Voice)」によって関係づけられており、そうした声を媒介とした関係が「対話的關係」と呼ばれる。例えば、2つ以上の「私」が個人内で葛藤を起こすことがあるが、そのとき様々なI-ポジションからの声が「私」を相対的に意味づけ、そんななかで葛藤が調整されていく。この調整過程が自己内の対話となるのである。

対話的自己理論を用いた研究として、移住経験を有する成人の文化的アイデンティティをテーマにしたものを挙げておく (Guzzardo et al., 2016)。筆者らは、ボストンで実施されたコホート研究の被験者のうち、同地域在住のプエルトリコ人に半構造化インタビューを行った。インタビューの内容は、プエルトリコとボストンとの比較の他、移住の理由、老化に伴う経験、社会保障の状況、差別に関してなどであった。分析対象は、そのうち米国本土に30年以上の居住歴がある26名 (年齢: 49~75歳) で、目的は彼らの語りから文化的アイデンティティに関わる複数の声を特定することだった。分析においては、対象者がどこを故郷と考えているか、どこに所属感を感じ、どこが最も快適に生活できているか、将来プエルトリコに戻るつもりかといった視点でコード化を行い、複数のI-ポジションを識別した。その上で、複数のI-ポジションの間の関係性——他との区別や重複、緊張関係や矛盾状態の有無等——を検討した。

分析結果として、文化的アイデンティティに関連したのものとしては3つのI-ポジションが特定された。第1

の「プエルトリコ人としての私」は、出身地への思慕やアイデンティティ、島国や文化、国民性に対する愛着を示す。第2の「現実主義者としての私」は1つ目と対照的で、米国本土との社会的なつながりを強調したものである。社会保障や福祉支援などの視点から、米国本土で生活することのメリットを重視する現実的な自己が反映されている。第3は「余所者としての私」で、プエルトリコ、米国本土の双方で、自身を「余所者」と意識するときの疎外感、所属感のなさを表す。具体的には、帰郷の際の現地の人々の視点から自身を余所者と感じたり、米国内の他者との「対話」から、そこにも所属できていない自分が意識されたりもする。

文化的アイデンティティの研究では、特に「所属」感の条件において、対話的關係が重要な意味をもつと言われてきた。(黒羽, 2013)。対話的自己理論は、こうした複数のI-ポジションが自己内対話のもとでどのような力動的關係をもつかを捉えることができる。また、あるアイデンティティを選択する状況や、生涯における中心的なアイデンティティの移り変わりを、その所属感との関係のなかで描写することも可能になる。

さらに対話的自己理論は、心理臨床実践における、クライアントの自己の物語を多面的・複合的に理解、支援することにも貢献するだろう。誰しも自己の考えや価値観などを単一のまとまりとして知り尽くしているわけではなく、ある特定のポジションのみでは把握できないことも多い。そうした部分を複数のポジション、それらの関係性、それを可能にする対話から捉えようとする試みは、人生上の経験に対し個人が今・ここで、どのような意味やイメージとして意味づけているかの理解を深めるのに役立つだろう。

## 7. おわりに

本稿は、近年臨床心理学のなかでも使われることが多くなってきた「ナラティブ分析」について、その多様なかたちを整理しようとしたものである。ナラティブが広がり厚みをもつものとして捉えたとしたら、その分析法にも広がり厚みが出てくるのは当然である。限られた紙数のなかでの紹介には限界があり、触れることのできなかった分析法も少なくない。「ナラティブ分析」を「ナラティブの分析」という意味でとらえたとしたら、質的分析のなかのいわゆるシーケンス分析にとどまらず、カテゴリー分析的なアプローチも可能になってくるので、紹介すべき分析法はさらに多くなる。今回は「の」のつかない「ナラティブ分析」の大まかな概略を整理す

るだけで我慢しなければならないだろう。

次なる疑問としては当然、こうした多様な分析法においてどれを使えばよいのか、という声が出てくると思う。その答えとしては、「研究のテーマと設問による」としか言いようがない。研究は説明すべき対象を説明しようとする営為であり、それは質的研究だろうが量的研究だろうが変わりはない。ただ、先行研究からテーマを拾ってくるが多い量的研究と異なり、質的研究では「説明すべき対象」を明確化することもまた、研究過程のなかで行うべき作業の1つである。この点はナラティブ研究も例外ではない。もちろんナラティブをデータとして収集し始めたときに暫定的なテーマや研究設問はあるだろうが、それをどう絞り精緻化していくかはデータを丁寧に読み整理していくなかで行われる必要がある。

今回の整理はまた、そうした問題の明確化の段階でも役立つだろう。常識の範囲で対象者のナラティブを読むと、私たちは語りの向こう側に語り手の「本音」を実体化したり「本当の」体験を読み取ろうとしたりして、場合によっては答えの出ないデータの森に迷い込んでしまうかもしれない。質的研究が、従来の視点では見落とされていた現実の側面に光を当てるというプロジェクトであるとしたら、まずはそうした常識的なナラティブ観を脇に置いておく必要がある。うまく脇に置くことができたとき、ナラティブはさらに複雑で多様で、探求すべき魅惑に満ちたものとして、私たちの前に再び姿を見せるだろう。そうした見方は、研究者としての私たちに必要なものであるばかりではなく、心理職として目の前のクライアントの語りに向き合うときに必須のものであるのは、言うまでもない。

## 参考文献

- Austin, J. L. (1962). *How to do things with words*. Oxford university press. (オースティン, J. L. 坂本百大 (訳) (1978). 言語と行為 大修館書店)
- Bamberg, M. (2004). 'We are young, responsible and male': Form and function of 'slutbashing' in the identity constructions in 15-year-old males. *Human Development*, 47, 331-353.
- Bamberg, M., & Georgakopoulou, A. (2008). Small stories as a new perspective in narrative and identity analysis. *Text & Talk*, 28(3), 377-396.
- Burr, V. (2015). *Social constructionism (3<sup>rd</sup> ed.)*. London: Routledge. (バー, V. 田中一彦・大橋靖史 (訳) (2018). ソーシャル・コンストラクショニズム 川島書店)
- Cain, C. (1991). Personal stories: Identity acquisition and self-understanding in Alcoholics Anonymous. *Ethos*, 19, 210-253.
- Chasioti, D., & Binnie, J. (2021). Exploring the Etiological Pathways of Problematic Pornography Use in NoFap/PornFree Rebooting Communities: A Critical Narrative Analysis of Internet Forum Data. *Archives of Sexual Behavior*, 50(5), 2227-2243.
- Creswell, J. W., & Poth, C. N. (2017). *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches (4th ed.)*. Los Angeles, Sage.
- Crossley, M. L. (1999). *Introducing narrative psychology*. Buckingham, UK: Open University Press. (クロスリー, M. L. 角山富雄・田中勝博 (監訳) (2009). ナラティブ心理学セミナー 金剛出版).
- Emerson, P., & Frosh, S. (2004). *Critical Narrative Analysis in Psychology: A Guide to Practice*. Palgrave Macmillan UK.
- Fivush, R., Reese, E., & Booker, J. A. (2020). Developmental Foundations of the Narrative Author in Early Mother-Child Reminiscing. In McAdams, D. P., Shiner, R. L., & Tackett, J. L. (Eds), *Handbook of Personality Development*. the Guilford Press.
- Hermans, H. J. M., & Kempen, H. J. G., (1993). *The Dialogical Self: Meaning as movement*. San Diego, California: Academic Press. (ハーマンス, H. J. M.・ケンペン, H. J. G. 溝上慎一・水間玲子・森岡正芳 (訳) (2006). 対話的自己 新曜社)
- Kelly, J. F., & Ward, C. L. (2020). Narratives of gang disengagement among former gang members in South Africa. *Criminal justice and behavior*, 47(11), 1509-1528.
- 黒羽カテリーナ (2013). 帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか——2つの事例を対話的自己論の視点から検討する——. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 7(1), 15-24.
- Langdrige, D. (2007). *Phenomenological Psychology: Theory, Research and Method*. Pearson Education. (田中省吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 (訳) (2016) 現象学的心理学への招待 金剛出版)
- Lenchuk, I., & Swain, M. (2010). Alise's small stories: indices of identity construction and of resistance to the discourse of cognitive

- impairment. *Language Policy*, 9(1), 9-28.
- Levitt, H. M. (2019). *Reporting qualitative research in psychology*. Washington, DC: APA.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in Public Places*. The Free Press.
- Goffman, E. (1981). *Forms of talk*. University of Pennsylvania Press.
- Guzzardo M. T.; I. L. G. Todorova; W. E. Adams; L. M. Falcon (2016). "Half Here, Half There": Dialogical Selves Among Older Puerto Ricans of the Diaspora *Journal of Constructivist Psychology*, 29(1) 51-65.
- 浜田寿美男 (2018). 虚偽自分を読み解く. 岩波書店.
- McAdams, D. P. (2013). The psychological self as actor, agent, and author. *Perspectives on psychological science*, 8(3), 272-295.
- 溝上慎一(2008). 自己形成の心理学——他者の森をかけたけて自己になる——. 世界思想社
- 森岡正芳 (2013). ナラティブとは. やまだようこ他 (編), 質的心理学ハンドブック (pp.276-293). 新曜社.
- Murray, M. (2000). Levels of narrative analysis in health psychology. *J Health Psychol*, 5(3), 337-347.
- 能智正博 (2022). 行為としての「病いの語り」. 質的心理学フォーラム, 12, 76-79.
- 大倉得史 (2008). 語り合う質的心理学: 体験に寄り添う知を求めて. ナカニシヤ出版.
- Riessman, C. K. (2008). *Narrative Methods for the Human Sciences*. SAGE. (リースマン, C. K. 大久保・宮坂 (監訳)(2014) 人間科学のためのナラティブ研究方法 クオリティケア)
- Tamboukou, M. (1999). Spacing herself: Women in education. *Gender and Education*, 11(2),125-139.
- Tamboukou, M. (2003). *Women, education and the self: A Foucauldian perspective*. London and New York: Palgrave/ Macmillan.
- 土屋雅子 (2016). テーマティック・アナリシス法——インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎—— ナカニシヤ出版
- Willig, C. (2003). 心理学のための質的研究法入門: 創造的な探求に向けて (上淵寿・大家まゆみ・小松孝至, 共訳.). 培風館.
- 山田富秋 (2013). 相互行為分析と談話分析. やまだようこ他 (編) 質的心理学ハンドブック. 新曜社 (pp.205-222)